

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 9 月 1 日現在

機関番号：87204

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K03305

研究課題名(和文) 成人ADHDの集団認知行動療法の治療者教育研修システムの構築

研究課題名(英文) Establishment of a therapist education and training system for group cognitive behavioral therapy for adults with ADHD

研究代表者

中島 美鈴 (Misuzu, Nakashima)

独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター(臨床研究部)・臨床研究部・非常勤研究員

研究者番号：40788220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、成人期の注意・欠如多動症患者を対象にした集団認知行動療法の実施に必要な臨床スキルをセラピストに身につけてもらうための研修体制の構築を目指した。その結果、講義およびロールプレイ演習を含む集合型研修およびその後のスーパービジョンという二段階の方式が完成した。スーパービジョンは、他の疾患と比較すると、より注意欠如・多動症の患者への理解と行動課題の設定に焦点づけ、臨床スキルのみならず組織内での体制づくりや連携などの課題もカバーしながら総合的に実施する必要があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知行動療法の研修はこれまでうつ病をはじめとした各疾患別に実施されてきたが、成人期の注意欠如・多動症の患者集団を対象にしたものは初めての試みであった。本研究で得られた知見により、研修内容をブラッシュアップして普及していくことで、注意欠如・多動症の臨床を担う専門家が増え、日本の注意欠如・多動症患者の受け皿が拡大するであろう。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to develop a training system to provide therapists with the clinical skills necessary to implement group cognitive-behavioral therapy for adults with attention/deficit hyperactivity disorder. As a result, a two-stage method consisting of group training and supervision, including lectures and role-play exercises, was completed. It became clear that supervision should focus more on understanding patients with attention-deficit/hyperactivity disorder and setting behavioral tasks, and should be conducted comprehensively, covering not only clinical skills but also issues such as system building and collaboration within the organization, compared to other disorders.

研究分野：臨床心理学

キーワード：集団認知行動療法 注意欠如・多動症 成人期 教育研修 スーパービジョン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

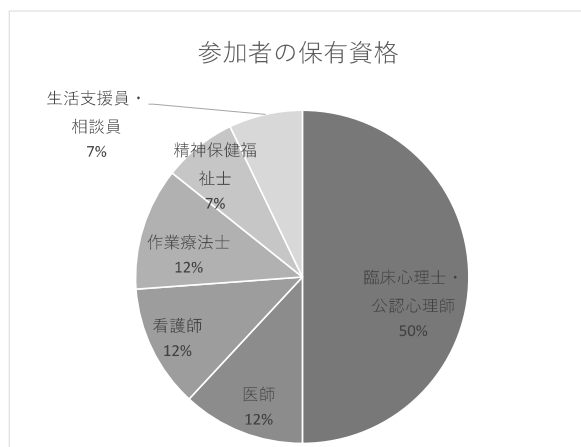
成人における注意欠如・多動症患者(Attention-Deficit / hyperactivity Disorder ; ADHD)には、気分障害が 38.3%、物質使用障害が一般人口の 3 倍も見られる。米国の ADHD による仕事上パフォーマンスの推定損失は年間 195 億ドルに相当するなど課題は多岐にわたる。治療ガイドラインでは、機能障害に対処するための集団認知行動療法が推奨されているが、治療者を養成する教育研修がないため成人 ADHD 患者の治療の受け皿は不足している。

2. 研究の目的

本研究では、成人 ADHD 患者を対象にした集団認知行動療法を実施する治療者の教育研修システムを構築し、その効果を検討した。

3. 研究の方法

(1) 対象：対人援助職 42 名であった。主な保有資格は、臨床心理士・公認心理師 21 名 (48.84%)、医師 5 名 (11.63%)、看護師 5 名 (11.63%)、作業療法士 5 名 (11.63%)、精神保健福祉士 3 名 (6.98%)、生活支援員・相談員 3 名 (6.98%) であった。また、集団認知行動療法の経験年数は平均 3.11 年 (標準偏差 3.20) であった。参加者は、集団認知行動療法研究会の主催する基礎研修終了者で、うつ病に対する集団認知行動療法に関する知識を有する者であった。



(2) 教育研修の概要：

教育研修として、42 名全員を対象にした講義およびロールプレイを実施するワークショップ形式の後、希望者を対象にスーパービジョン形式を提供する二段階を設定した。

第一段階：ワークショップ：対人援助職を対象に、成人 ADHD および集団認知行動療法に関する講義とロールプレイを含む 2 日間の研修を実施した。

(1日目) 3月27日(土)

| 時間 | 内容 | 講師 |
|--------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 13:00-13:15 | 開会の挨拶 | 中島美鈴 |
| 13:15-14:35 | ADHD とは (診断基準、神経心理学的基盤-原因仮説、治療ガイドライン) | 九州大学 黒木俊秀先生 |
| 14:35-14:50 | 質疑応答 | |
| 14:50-15:00 | 休憩 | |
| 15:00-16:00 | ADHD の認知行動療法 (注意欠如・多動症の認知行動モデル) | 北海道医療大学 金澤潤一郎先生 |
| 16:00-16:35 (35分間) | ケースフォーミュレーション (架空事例) | ブレイクアウトルーム (1:1 (ランダム) 同じペアで 3 回) |
| 16:35-16:55 | 解説と質疑応答 | |
| 16:55-17:00 | 事務連絡 | |

(2日目) 3月28日(日) 10:00-17:00

| | | |
|--------------------|---|----------------------|
| 10:00-10:30 | ADHD の心理教育と面接の導入および ADHD で用いられる技法 | 肥前精神医療センター臨床研究部 中島美鈴 |
| 10:30-10:55 (25分間) | ロールプレイ 事例：主訴が広範囲にわたる 40 代女性への面接の導入 (1:1 でロールプレイ) | ブレイクアウトルーム 1:1 |
| 10:55-11:15 | 解説と質疑応答 | |
| 11:15-12:00 | 治療困難例にどのように対応するか (1) | 北海道医療大学 金澤潤一郎先生 |
| 12:00-13:00 | 昼休憩 | |
| 13:00-13:30 (30分間) | ロールプレイ (集団にうまくのれない人の個別フォローの～ASD や感情調節困難のある参加者の場合) | ブレイクアウトルーム 1:1 |
| 13:30-13:50 | 解説と質疑応答 | |
| 13:50-14:00 | 休憩 | |
| 14:00-14:50 | 集団で行うには(G-CTSを用いたグループのコツ) | 立教大学現代心理学部 松永美希先生 |
| 14:50-15:20 (30分間) | ロールプレイ (アジェンダの設定を中心に。) | ブレイクアウトルーム |
| 15:20-15:40 | 解説と質疑応答 | |
| 15:40-15:50 | 休憩 | |
| 15:50-16:15 | 治療困難例にどのように対応するか (2) | 肥前精神医療センター 中島美鈴 |
| 16:15-16:40 (25分間) | ロールプレイ (集団におけるホームワーク不履行への対処) 事例：40 代女性ホームワークをやらせようとおもえげできるのにならなかった | ブレイクアウトルーム |
| 16:40-16:50 | 解説と質疑応答 | |
| 16:50-17:00 | 事務連絡 SV の案内 | |

第二段階：スーパービジョン：研修受講修了者のうち希望者 12 名を対象に、研修 3 ヶ月後および 6 ヶ月後に (実施時期は目安でありコロナ感染状況や所属機関の準備状況などを考慮して設定)、各参加者がその後実施した集団認知行動療法セッションについて事前にファシリテーター本人が G-CTS を自己評定し、それに基づいて個別の SV を実施した。なお、コロナ流行の影響にて受講者の所属機関の多くではグループ形式の治療が全て停止となったため、SV の対象をグループ形式のみでなく個別形式の認知行動療法も範囲に含めて

実施した。

1. 集団 CBT の SV 希望：6 名(実施できたのは 3 名)
 2. 個人 CBT の SV 希望：4 名(実施できたのは 3 名)
 3. 特定のケースの SV よりは今後の業務にどのように研修で学んだことを活かせばよいかに関するコンサルテーション希望：2 名であった。(実施に実施できたのは 2 名)
- *未実施分は、コロナ流行状況によって CBT 実施自体が中止となったためであった。

(4) 集団 CBT の SV の方法

集団 CBT の SV は、事前にオンライン上(Google form)で G-CTS の行動チェックリストを自己評価し、スーパービジョンシートを事前に作成し、スーパーバイザーと共有した上で、ビデオ会議システム(zoom)を用いて実施した。1 回の SV は 60 分間であった。

スーパービジョンシートの項目は次のとおりであった。

1. グループの概要(目的、対象、全 回中第 回のセッション)
2. このセッションの概要(到達目標、アジェンダ、参加者の特徴、リーダーとしてできた点、リーダーとして疑問の点や検討したい点)

(5) 個別 CBT の SV の方法

個別 CBT の SV は、事前にオンライン上(Google form)で CTS を自己評価し、スーパーバイザーと共有した上で、ビデオ会議システム(zoom)を用いて実施した。1 回の SV は 60 分間であった。

(6) コンサルテーションの方法

特定のケースの SV ではなく今後の業務にどのように研修で学んだことを活かせばよいか、所属機関のセッティングの問題から定期的に CBT を実施することが難しい場合などに関するコンサルテーションの希望もあったため、実施した。事前準備はなく、形式は自由で、ビデオ会議システム(zoom)を用いて実施した。1 回の SV は 60 分間であった。

(7) 研修効果の指標：

集団 CBT のスーパービジョン(SV)の効果に対しては、集団認知行動療法治療者評価尺度(G-CTS)を用いた。これは、臨床面のスキルを評価する。個人に対する認知行動療法の治療者評価尺度(Cognitive Therapy Rating Scale; CTRS)をもとに、申請者ら作成したもの。アジェンダの設定、フィードバック、理解力、対人能力、共同作業、ペース調整および時間の有効活用、誘導による発見、重要な認知または行動への焦点づけ、変化に向けた方略、認知行動技法の実施、ホームワーク、他の参加者との関係を用いた介入の 12 項目から構成され、0 点~6 点のスーパーヴァイザーおよびセラピスト自身が評価。得点が高いほど治療者のスキルの高いことを示している。各項目での到達目標と、その目標達成のために行うこと、採点のための行動チェックリストの 3 つの要素で解説されている。信頼性と妥当性は確認済みである。

個別 CBT の SV の効果については、個人に対する認知行動療法の治療者評価尺度(Cognitive Therapy Rating Scale; CTRS)を用いた。

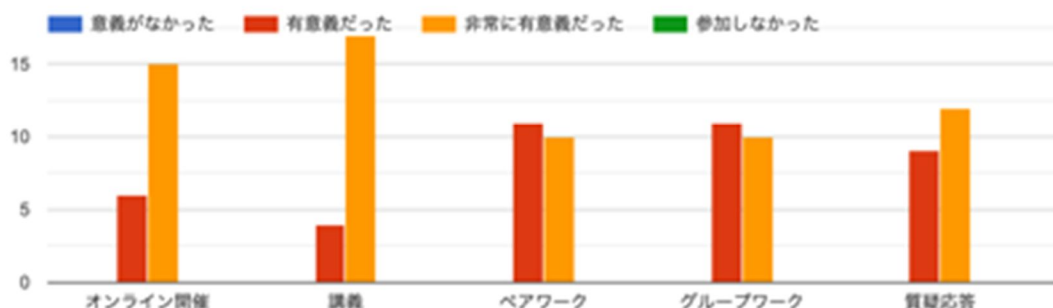
コンサルテーションの効果については、コンサルテーションの担当者より匿名性を確保しながらどのような点で臨床現場でのつまづきが見られるのか、どのようなコンサルテーションでそれが解決したのかについて聴取した。

4. 研究成果

(1) 第一段階：ワークショップの実施結果

受講者のうちアンケートに回答した 12 名(59.1%)が「非常に満足した」、9 名(42.9%)が「おおむね満足した」と回答した。

以下の項目は、どのくらい満足されましたか。



多くを占めており、おおむね満足度の高い研修となっていた。中でもオンライン開催という形式には、「非常に有意義だった」との声が多くみられた。また、「成人期の ADHD の認知行動療法についてここまでまとまった時間講義を聞くことがなかった」との感想も多くみられ、「講義」に対する満足度が高く、成人期の ADHD の認知行動療法の知識に関する情報についてのニーズが大きくなった。

一方で、ペアワークやグループワークは講義に比べると満足度はやや低めで、「時間が足りない」「もっとグループの練習の場が欲しかった」との声もあり、できれば対面での十分な演習時間の確保が課題として残った。

また、質疑応答では、講義を担当した講師に対して、他の講師やファシリテータが感想を述べ、質問したことが呼び水となり、参加者の皆様からも多くの質問が寄せられた。講義への理解がより深まり、実践のイメージをもつことができたという感想も多くみられた。

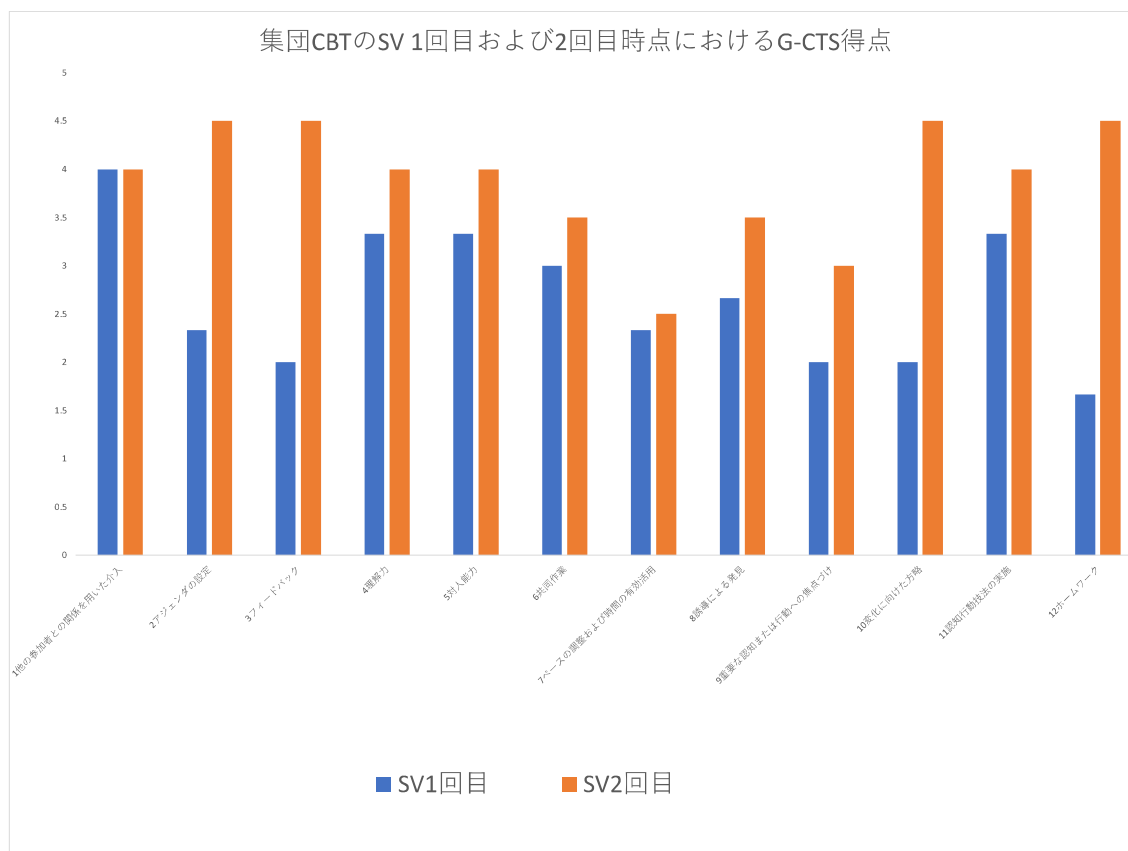
(2) 第二段階：スーパービジョンの実施結果

集団 CBT の SV の結果

集団 CBT の SV では、2 回目の SV 実施後の G-CTS の各項目における自己評定得点は、1 回目の SV 前の得点と比較して高かった。これは 12 項目すべてにおいて言えた。

特徴的な点として、「アジェンダの設定」および「フィードバック」、「変化に向けた方略」、「ホームワーク」の得点の増加が大きかった。これらの項目は、いずれも認知行動療法のアジェンダ、技法の選択、ホームワークの設定という基礎構造ともいえる要素であり、行動的にも明確で変容しやすい項目といえる。これらの基礎構造とは異なった趣である「フィードバック」は、一部の参加者から出た話題をグループ全体で共有するために言い直すことや、参加者からの発言とその背景の認知や感情についてセラピストが受け取り理解したことを示すことなどが含まれる。集団 CBT におけるフィードバックは、個別 CBT におけるフィードバックと重なる部分もあるが、セラピストと発言した参加者の 1:1 のやりとりで終始しないなどの独特な部分も含まれ、これがグループの初心者には難しく感じられることがしばしばある。SV によってこの点が大きく改善されたといえる。

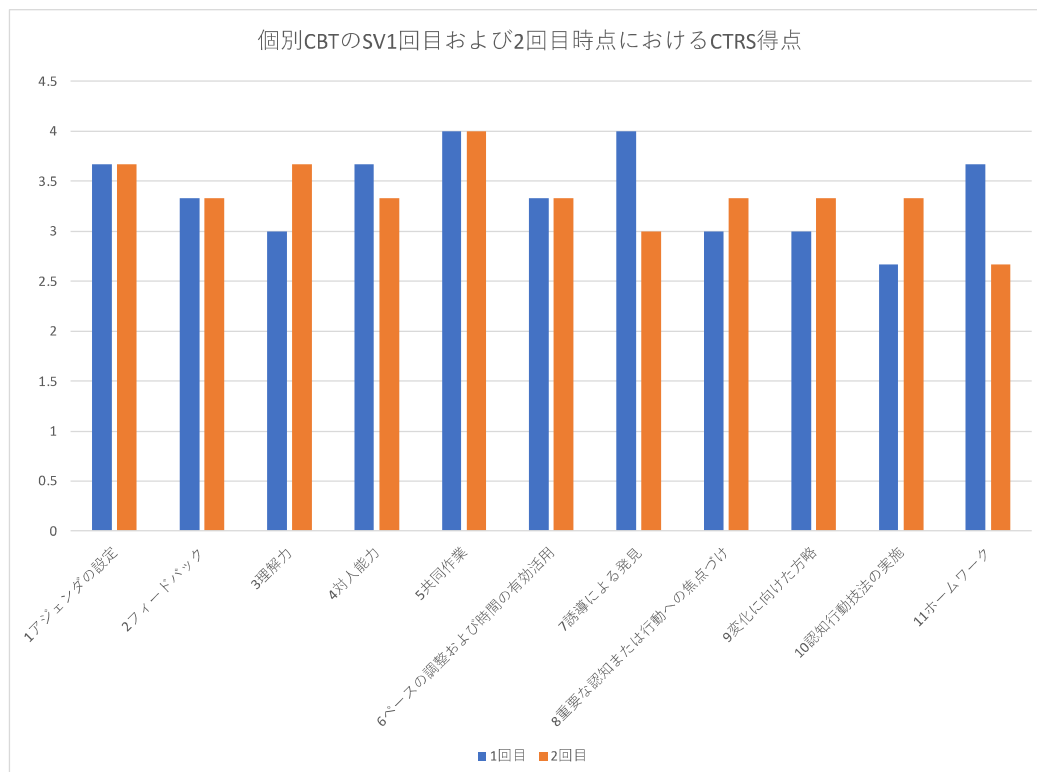
一方で、「他の参加者との関係を用いた介入」および「ペースの調整および時間の有効活用」では、他の項目に比べて SV の前後であまり変化がみられなかった。「他の参加者との関係を用いた介入」については、初期値が 4 点前後とかなり高得点であることが影響したと考えられる。また、「ペースの調整および時間の有効活用」は、集団 CBT では個人 CBT 以上に、時間管理が難しいことが示され、今後の SV の課題としたい。



個別 CBT の SV の結果

集団 CBT の SV では、2 回目の SV 実施後の G-CTS の「理解力」および「重要な認知への焦点づけ」、「変化に向けた方略」、「認知行動療法技法の実施」の項目における自己評定得点は、1 回目の SV 前の得点と比較して高かった。「対人能力」、「誘導による発見」および「ホームワーク」においては、得点は SV の前後で低くなっていた。その他の項目はほぼ同じであった。

特徴的な点として、「理解力」および「重要な認知への焦点づけ」、「変化に向けた方略」、「認知行動療法技法の実施」という、クライアントをどのようにケースフォーミュレーションするか、どの技法を選択し実施するかと言った点で臨床技能を伸ばすことができていた。SV を実施したスーパーヴァイザーへのインタビューからは、特に「理解力」に焦点づけた SV が実施されていたこと、「誘導によってクライアントに発見させるというよりは、次回までに実施する課題について話し合う」ということが重視されていたことが背景として考えられた。ホームワークについては、2 回目の SV で検討したセッションが最終セッションでありホームワークを出す構造ではなかったケースが含まれていたことから大きく得点が下がっていたが、そのケースを除外すれば得点は上がっていた。以上をまとめると、個別 CBT の SV では、ADHD のクライアントをどのように理解して、どのような行動課題（ホームワーク）を実生活で試すかを具体的に検討するスタイルが形作られていったことがわかる。



コンサルテーションの結果

コンサルテーションには、産業や教育などの医療以外の現場における CBT 実施の在り方、ADHD 以外の人も混在するグループの在り方、知的な能力が低い集団への実施の仕方、ADHD 診断を受けていないがその傾向がある人も混在するグループの在り方、一定の面接時間や面接場所を確保できない環境における関わり方、オンラインで実施するコツのような複雑で多様な形式における相談が議題となっていた。中には、セラピストの臨床スキルそのものへの助言よりは、セラピストが所属機関にどのように ADHD の CBT の必要性を示すといいかといった組織内での制度整備の問題や、クライアントの家族や職場や学校などどのように連携すればよいかといった連携の問題なども話題に上がっていた。いずれの話題も、臨床をとりまく非常に重要なものであり、特に ADHD の臨床ではこの割合が高いと考えられる。スーパービジョンという形式においても、こうした問題について取り上げることで実行可能性の高い指導体制が構築できるであろう。

(3) 総合考察と今後の課題

本研究では、成人期の ADHD 患者を対象にした集団認知行動療法の実施に必要な臨床スキルをセラピストに身につけてもらうための研修体制の構築を目指した。その結果、講義およびロールプレイ演習を含む研修およびその後のスーパービジョンという二段階の方式が完成した。認知行動療法の研修はこれまでうつ病をはじめとした各疾患別に実施されてきたが、成人期 ADHD を対象にしたものは初めての試みであった。特にスーパービジョンは、他の疾患と比較すると、よりクライアントへの理解と行動課題の設定に焦点づけられたものであり、臨床スキルのみならず組織内での体制づくりや連携などの課題もカバーしながら総合的に実施する必要のあることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Misuzu Nakashima, Naoko Inada, Yoshie Tanigawa, Masako Yamashita, Emi Maeda, Megumi Kouguchi, Yoko Sarada, Hiroyuki Yano, Keisuke Ikari, Hironori Kuga, Naoya Oribe, Hitoshi Kaname, Tsuyoshi Harada, Takefumi Ueno, Toshihide Kuroki | 4. 巻 26 |
| 2. 論文標題 Efficacy of Group Cognitive Behavior Therapy Targeting Time Management for Adults with Attention Deficit / Hyperactivity Disorder in Japan: A Randomized Control Pilot Trial. | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Attention Disorders | 6. 最初と最後の頁 377-390 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/1087054720986939 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 病院内での多職種とCBTを実践・連携するための工夫 動機づけの低い患者に対してチームで認知行動療法を始めるには. | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 認知療法研究 | 6. 最初と最後の頁 102-103 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 【カウンセラーの「問う力・聴く力」】発達障害の「こまりごと」にどう対処するか まとまらない主訴. | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 臨床心理学 | 6. 最初と最後の頁 429-433 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 巻 増刊7 |
| 2. 論文標題 【疾患・領域別最新認知行動療法活用術】疾患別 成人期のADHDの認知行動療法. | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 精神療法 | 6. 最初と最後の頁 105-115 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴・稲田尚子・谷川芳江・山下雅子・高口恵美・前田エミ・血田洋子・織部直弥・要 斉・矢野宏之・猪狩圭介・久我弘典・原田剛志・上野雄文・黒木俊秀 | 4. 巻 60 |
| 2. 論文標題 成人期ADHD治療のバリエーションー成人期ADHD者の時間管理スキルに焦点を当てた集団認知行動療法 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域 | 6. 最初と最後の頁 521-546 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 巻 76 |
| 2. 論文標題 大人のADHDと認知行動療法の実践 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 国際経済労働研究 | 6. 最初と最後の頁 13-19 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 成人期の注意欠如・多動症の認知行動療法 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 臨床精神医学 | 6. 最初と最後の頁 439-444 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 再起動! 集団療法 成人期の注意欠如・多動症の人のための集団認知行動療法 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 精神科治療学 | 6. 最初と最後の頁 1253-1257 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島美鈴, 松永美希 |
| 2. 発表標題 オンライン認知行動療法のセラピストに必要な技能の教育研修プログラムの開発 |
| 3. 学会等名 第20回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 働く人のための時間管理 |
| 3. 学会等名 第3回日本うつ病リワーク研究会年次大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 大会特別企画1：成人期の注意欠如・多動症の認知行動療法 |
| 3. 学会等名 第20回認知療法・認知行動療法学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 ワークショップ：困難事例を検討する。 |
| 3. 学会等名 第11回集団認知行動療法研究会学術総会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Misuzu Nakashima, Naoko Inada, Hiroyuki Yano, Hironori Kuga, Naoya Oribe, Takefumi Ueno, Toshihide Kuroki. |
| 2. 発表標題 Efficacy of Group Cognitive Behavior Therapy targeting time management for Adult with Attention Deficit / Hyperactivity Disorder: A randomized control trial. |
| 3. 学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Misuzu Nakashima, Miki Matsunaga, Makoto Otani, Hironori Kuga, Daisuke |
| 2. 発表標題 Reliability and validity of the Group Cognitive Therapy Scale. |
| 3. 学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies. (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yusuke Kyuragi, Noya Oribe, Sho Fukushima, Naho Nakayama, Risa Hayashida, Katsumi Kawakami, Masasuke Onoue, Misuzu Nakashima, Takefumi Ueno. |
| 2. 発表標題 Alterations of functional brain network after group cognitive^behavioral theraoy for adults with attention-deficit / hyperactivity disorder. |
| 3. 学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies. (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 大会企画シンポジウム 13：病院内での多職種と CBT を実践・連携するための工夫：動機づけの低い患者をチームで支える時に臨床心理士が果たす役割 |
| 3. 学会等名 第19回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島美鈴・松永美希・久我弘典・大谷真・藤澤大介 |
| 2. 発表標題 集団認知行動療法治療者評価尺度の ADHD症例における妥当性・信頼性の検討. |
| 3. 学会等名 第19回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島美鈴・谷川芳江・山下雅子・前田エミ・牧野加寿美・要齊. |
| 2. 発表標題 成人期の注意欠如・多動症の集団認知行動療法の効果に影響する要因. |
| 3. 学会等名 第19回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島美鈴. |
| 2. 発表標題 様々な領域における集団認知行動療法の工夫とその援用可能性. |
| 3. 学会等名 第19回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 牧野加寿美・前田エミ・中島美鈴・要齊. |
| 2. 発表標題 リワークデイケアにおける成人期ADHD患者の時間処理障害に対する集団認知行動療法. |
| 3. 学会等名 第19回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 中級者向け事例別ロールプレイ～G-CTSを用いた困難事例における工夫のポイント |
| 3. 学会等名 集団認知行動療法研究会中級研修会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 成人期のADHDの認知行動療法 |
| 3. 学会等名 第21回認知療法・認知行動療法学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 前田工ミ, 牧野加寿美, 中島美鈴, 要齊 |
| 2. 発表標題 休職中の発達障害者に対する時間管理の集団認知行動療法プログラムの作成 |
| 3. 学会等名 第21回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 時間管理を困りごととする人を対象にしたオンライン集団認知行動療法 |
| 3. 学会等名 第21回認知療法・認知行動療法学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島美鈴 |
| 2. 発表標題 グループにおける否認と回避を解決するための12のポイントと集団認知行動療法治療者評価尺度を用いた中級者向け実習 |
| 3. 学会等名 集団認知行動療法研究会2021年度中級研修（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計8件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 中島 美鈴, 稲田 尚子, 谷川 芳江, 山下 雅子, 高口 恵美, 前田 エミ | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 星和書店 | 5. 総ページ数 144 |
| 3. 書名 ADHDタイプの大人のための時間管理プログラム:スタッフマニュアル. | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 NHK出版 | 5. 総ページ数 215 |
| 3. 書名 あの人はなぜ定年後も会社に来るのか (NHK出版新書 644, 644). | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 中島 美鈴, 前田 エミ, 高口 恵美, 谷川 芳江, 牧野 加寿美 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 星和書店 | 5. 総ページ数 128 |
| 3. 書名 働く人のための時間管理ワークブック | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 主婦の友社 | 5. 総ページ数 224 |
| 3. 書名 ADHD脳で困ってる私がしあわせになる方法 : 普通を目指さなければ「ツライ」は驚くほど「ラク」になる | |

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 世潮出版 | 5. 総ページ数 221 |
| 3. 書名 認知行為療法 - 恐慌的情绪勒索 | |

| | |
|--|-----------------------------------|
| 1. 著者名 中島美鈴 分担執筆 (野島一彦・岡村達也 . (監修), 小林孝雄・金子周平 . (編著)) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 木立の文庫 | 5. 総ページ数 169 (分担執筆範囲: 138-140) |
| 3. 書名 公認心理師 実践ガイダンス 2. 心理支援 (公認心理師実践ガイダンス) | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 中島美鈴, 藤澤大介, 松永美希, 大谷 真 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 金剛出版 | 5. 総ページ数 150 |
| 3. 書名 もう一歩上を目指す人のための集団認知行動療法治療者マニュアル | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 中島美鈴, 前田エミ, 高口恵美, 谷川芳江, 牧野加寿美 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 星和書店 | 5. 総ページ数 128 |
| 3. 書名 働く人のための時間管理ワークブック | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|